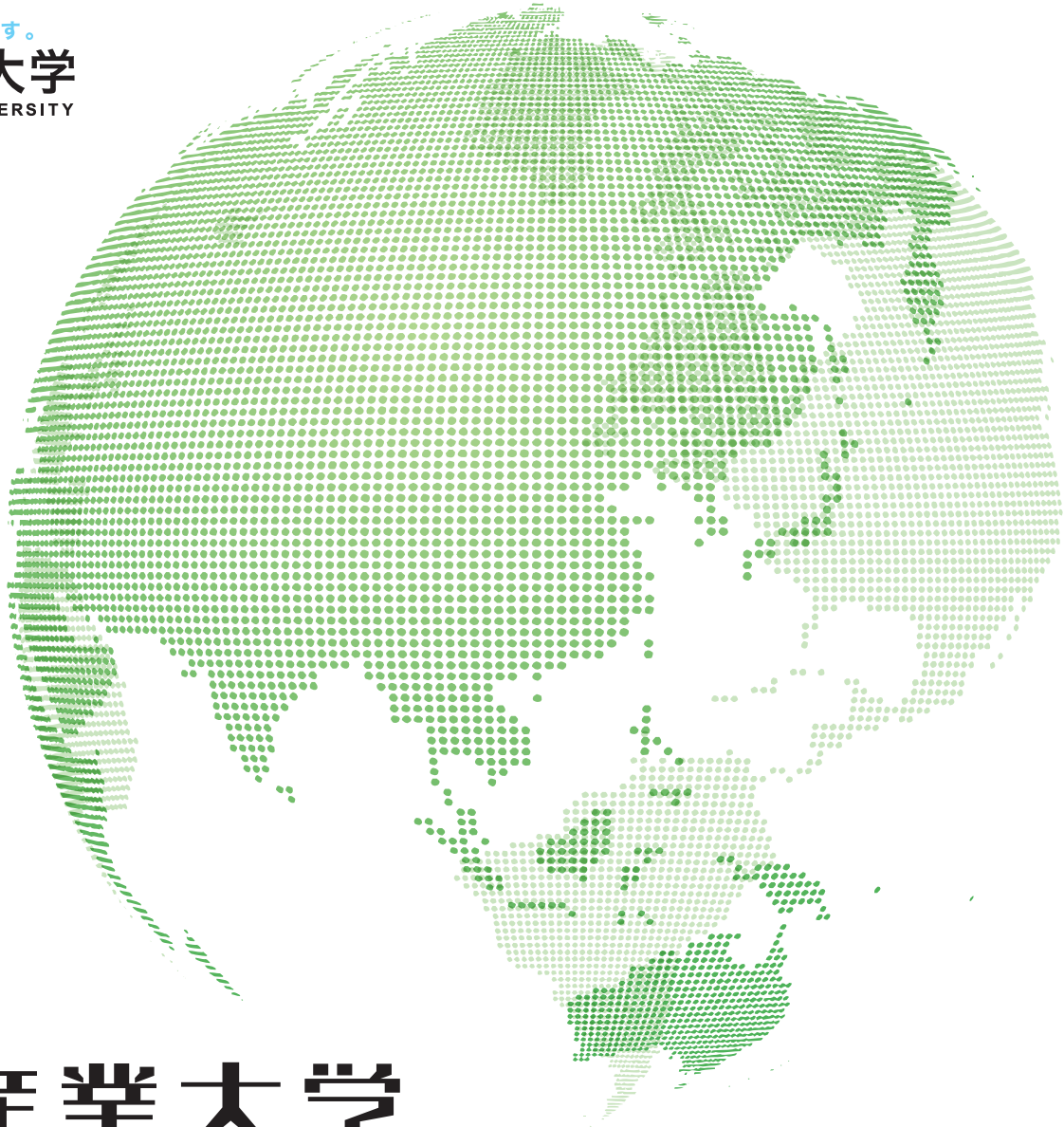
むすんで、うみだす。
京都産業大学
KYOTO SANGYO UNIVERSITY



京都産業大学 世界問題研究所 ニューズレター

2023. 3 Vol.8

NEWS LETTER

CONTENTS

活動記録

（1）「歴史的形成作用としての科学技術
——西田幾多郎とハイデッガー」
京都工芸繊維大学 教授　秋富　克哉　2

（2）法学部主催、世界問題研究所・国際関係学部・法学会共催講演会
倉井高志氏（前・駐ウクライナ大使）「ウクライナ情勢から考える—世界を読み解くこと—」　3

所員による新刊書の紹介

文化学部教授・志賀浄邦〔著〕
『シャーンタラクシタ『真実集成』の原典研究
—業報・論理・時間—』　4

その他

2022 年度研究会開催内容／研究所メンバー　7

【活動記録】

（1）「歴史的形成作用としての科学技術——西田幾多郎とハイデッガー」

報 告 者	秋富 克哉（京都工芸繊維大学 教授）
開催場所	京都産業大学 真理館 SR310 教室＋オンライン（Teams）
開催日時	2022 年 6 月 22 日（水）15:00 ～ 17:00

研究会概要

世界問題研究所では、京都工芸繊維大学教授で哲学が御専門の秋富克哉教授をお迎えし、研究会を開催した。秋富先生からは「歴史的形成作用としての科学技術——西田幾多郎とハイデッガー」と題して御講演いただき、講演後は、参加者と活発な質疑応答がなされた。

世界問題研究所では、令和 2 年度から 4 年度まで「科学技術の発展と人類社会の変化」というプロジェクト・テーマの下、文理を越えた学術交流の場として研究会を実施することを試みている。今回の研究会もそうした一連の企画の一つとして実施された。

講演では、西田幾多郎とハイデッガーという 20 世紀の哲学の巨匠たちが科学と技術の本質を世界への問いとともに展開したことが、詳細に論じられた。哲学という普遍的観点からプロジェクト・テーマを掘り下げていただいたおかげで、参加者それぞれが自己の問題関心をより深める手がかりを得ることができた。充実した質疑応答の時間と相まって、意義深い研究会となった。

報告の準備をされる秋富教授

【活動記録】

（2）法学部主催、世界問題研究所・国際関係学部・法学会共催講演会
倉井高志氏（前・駐ウクライナ大使）「ウクライナ情勢から考える―世界を読み解くこと―」

開催場所	京都産業大学 神山ホール
開催日時	2022 年 6 月 28 日（火）13:15 ～

講演会概要

前・駐ウクライナ大使 倉井高志氏を講師に迎え、世界問題研究所が共催する講演会（法学部主催）が、2022 年 6 月 28 日（火）午後 1 時 15 分から神山ホールで開催された。同講演会は、〈第一部〉倉井前大使による講演、〈第二部〉倉井前大使・岩本誠吾教授・河原地英武教授の三人のパネラーと中谷真憲教授の司会によるパネルディスカッションの二部構成で行われた。事前に参加応募学生から百篇以上の質問が寄せられたほか、当日も法学部と国際関係学部を中心に五百余名の学生が集まり、倉井前大使を始めとする登壇者の話に熱心に聴き入るなど、コロナ禍が始まって以来久しぶりに大学らしい知的熱気に満ちた会合となった。倉井前大使は、本学学生の知的関心の高さを称えるとともに、同講演会が激動する世界情勢と日本外交のあり方とを熟考する機会と成ることを願う、と締め括った。

スタッフセミナー

講演会終了後、神山ホール第 1 セミナー室で、法学会と世界問題研究所との共催によりスタッフセミナーが開催された。同セミナーは、前・駐ウクライナ大使 倉井高志氏を囲み、十数名の本学教員との間でおよそ 1 時間半にわたって懇談的に行われた。

パネルディスカッション

スタッフセミナー

【所員による新刊書の紹介】

文化学部教授・志賀浄邦〔著〕『シャーンタラクシタ『真実集成』の原典研究 ―業報・論理・時間―』

本学より出版助成を受け、2022 年 3 月末に上記の書籍を無事出版することができました。改めまして、拙著の制作・出版にあたってお世話になった関係各位に心より御礼申し上げます。本書は、8 世紀にインドにおいて書かれた『真実集成』という文献とその注釈『真実集成細注』3 章分の校訂テキスト（両作品の原語はサンスクリット語、チベット語訳はあるが漢訳はない）とその和訳及び注解を主な内容としていますが、筆者がこれらの作品に出会ったのは学部 3 回生の頃でした。当時お世話になった先生（現在日本学士院会員でもあられる御牧克己先生）に薦めていただいたことをきっかけに同作品の 1 章（「三時の考察」）を対象テキストに選定しました。その後、修士論文及び博士論文執筆時に同作品の別の章（「推理の考察」）の解読研究に取り組みました。また本書所収のもう一つの章（「行為とその報いの関係の考察」）については、数年前に参画した共同研究プロジェクトの中で解読作業を行いました。サンスクリット原典の壁は厚く、学部生の頃は全く歯が立ちませんでしたが、不思議なものでテキストとのコンタクトを重ねるにつれ、二人の作者との「同期」のようなものが起こり始め、作者の言わんとすることが少しずつ理解できるようになってきました。いずれにしても両作品と筆者の関わりは、そのまま筆者の研究者としてのキャリアと重なっており、とりわけ思い入れのあるテキストです。

『真実集成』と『細注』の作者はシャーンタラクシタ（725–788 年頃）とカマラシーラ（740–795 年頃）という人物ですが、二人はいずれもインドのナーランダー大僧院出身の著名な学僧で師弟関係にありました。時期は異なるものの両者ともチベットに招聘され、チベット仏教の創始と確立に決定的な役割を果たしました。シャーンタラクシタの死後チベットに招聘されたカマラシーラは中国仏教側の論客・摩訶衍を論破し、インド仏教の正統性と優位性を示します。サムイェーの宗論と呼ばれるこの論争を通じて、「頓悟（ただちに悟りの境地に至ること）」を主張する中国の仏教ではなく「漸悟（順を追って

写真①：新刊書影

写真②：筆者近影

徐々に悟りの境地に近づくこと)」を主張するインドの大乗仏教がチベットに導入されることになりました。このような経緯から、シャーンタラクシタとカマラシーラはチベット仏教の始祖でもあるということになります。チベット仏教の伝統によれば、二人はナーガールジュナ（龍樹）の流れを汲む「中観派」または唯識派と融合した「瑜伽行中観派」に属していたと言われています。

二人が所属していたナーランダー大僧院は、当代随一の教育・研究機関であり、「大学」としての機能も有していました。現在も遺跡が残るナーランダー大学（写真③）は、グプタ朝のクマーラグプタ1世によって5世紀頃に創立されたと言われています。全盛期のナーランダー大学には、インド各地やアジア地域から多くの留学生が集まったと伝えられており、中国出身の学僧玄奘や義浄もこの地を訪れて仏教教理を学んだことはよく知られています。創立以来、多くの優れた学僧を輩出し、8世紀以降は密教研究の中心地としても栄えましたが、12世紀頃イスラム勢力によって破壊されたと言われています。

さて、『真実集成』の冒頭の一連の詩節において、仏教の根本教理である「縁起（縁って起こること)」の限定句――例えば「行為とその報いの関係を確立するためのよりどころであること」（本書所収の第9章「行為とその報いの関係の考察」に対応；対論者は存続する行為主体アートマンの存在を主張するミーマーンサー学派)、「明瞭な定義を備えた二種の正しい認識手段によって確定されるものであること」（同じく本書所収の第18章「推理の考察」他に対応；対論者は仏教徒が主張した論証因の三条件を批判し一条件を主張したジャイナ教徒他)、「[事物が本性を保ったまま三つの時を] 移り行くことがないこと」(同じく本書所収の第21章「三時の考察」に対応；対論者は、事物の本性は過去・現在・未来の三時にわたって実在すると主張する仏教内部の説一切有部）など――が列挙されますが、『真実集成』及び『細注』のそれぞれの章ではそれらの限定句と関連する哲学的主題が議論されています。シャーンタラクシタとカマラシーラは、それぞれの主題に関する仏教内外の学説を検討・批判することを通じて仏教徒として立脚すべき立場を打ち出し、その妥当性を立証することを目指しました。本書に収録されている3つの章に限っても、至るところで高度な哲学的・宗教的議論が展開されており、作品全体を貫く明晰な論理と蒙を啓かんとする彼らの卓越した知見には驚嘆せざるをえません。さらに各章において、「縁起の理法を根本教理とする者たち」としての公式見解が提示されることになりますが、シャーンタラクシタとカマラシーラの批評の対象は仏教内部の学説にも及び、両作品は「仏教徒であることとはいかなることか」を問い直そうとする契機すら秘めています。また両作品の特徴の一つとして、散逸したか、現存していない文献やテキストを紹介・引用していたり、これまでに知られていない学説や思想家について言及している点を挙げることができます。すなわち両作品は当時の多様な学説に関する情報を保存する「思想のアーカイブ」のような役割も果たしており、ここに記録されている対論者の見解・学説は8世紀インドの思想状況を知る上で極めて重要な資料となっています。

写真③：ナーランダー大僧院（大学）跡

本書において翻訳とテキストを提示した3つの章において扱われる「行為とその責任の所在」「推論」「存在と時間の流れ」といった主題は、西洋思想または哲学一般においてもそれぞれ倫理学・論理学・時間論などとして論じられるものですので、将来的にはインド・仏教思想と西洋思想の比較も行えたらと考えています。また元々「洗練された」「精巧に作られた」という意味をもつ「サンスクリット」と

写真④：ジャイナ教徒が運営する文献収蔵庫

写真⑤：ジャイナ教最大の聖地シャトルンジャヤ山

いう言語は、現代において日常言語としては使用されていない古典語の一つです。難解な言語の代名詞として言及されることも多いサンスクリット語によって書かれたテキストを翻訳するにあたっては、漢訳語や仏教特有の専門用語はできる限り使わないようにする、翻訳のみを読んでも意味をつかめるような文章にするなど、専門外の一般読者にとっても理解しやすい表現となるよう工夫したつもりです。翻訳を通じて、少しでもインド・仏教哲学の面白さとシャーンタラクシタとカマラシーラという二人の人物の鋭い知性に触れていただけたら幸いです。

なお、本書の表紙に使用されている写真は実際の貝葉本（ヤシの葉に書かれた写本で 12 世紀頃のもの）の画像で、原典の読解の際に実際に使用したものの一部となりますが、インド・ラジャスターン州ジャイサルメールにあるジャイナ教寺院の文献収蔵庫に保管されていて現在は直接閲覧することができない大変貴重な資料です。校訂テキストの作成にあたってはそのジャイサルメール写本の複製と考えられる紙製のパータン写本も使用しました。同写本はグジャラート州パータンの、同じくジャイナ教寺院の文献収蔵庫（写真④）に保管されています。また同州は、ジャイナ教徒の多い地域として知られていますが、とりわけパリタナという町にはインド全土から巡礼者たちが訪れるジャイナ教最大の聖地シャトルンジャヤ山（写真⑤）が存在します。ではどうして仏教徒の書いた哲学書がジャイナ教徒の手によって書写され、長きにわたって保存されてきたのでしょうか。ジャイナ教徒は伝統的に、あらゆる物事や事象に対して「ある観点から見れば〇〇であるが、別の観点から見れば××である」という姿勢または認識方法（多面的実在論または相対論）をとりますが、それは当該の物事や事象をあらゆる角度・側面から検証したり、あらゆる可能性を吟味することを意味します。それはジャイナ教内外の教義や思想を吟味・分析する場合も同様で、ジャイナ教の学僧たちは、当時のインドにおいて流布していたあらゆる学説を網羅的に収集し、理解しようと努めたのではないかと思われます。『真実集成』と『細注』は、様々な学説が収集されまとめられた「百科全書的な作品」としてジャイナ教徒によっても評価・重宝され、他学派の学説の理解・把握のために保持・利用されてきたと考えられます。

いずれにしましても、本書が、インド哲学・仏教学の研究者のみならず、他の文化圏の思想や哲学を研究している方々にも読まれ、他分野の研究者との対話の促進に少しでも寄与することを願っています。本書は、本学の図書館や 11 号館の読書室にも入っていますので、関心のある方は一度手に取ってみていただけたら幸いです。（志賀浄邦）

【その他】

《2022 年度研究会開催内容》

定例研究会

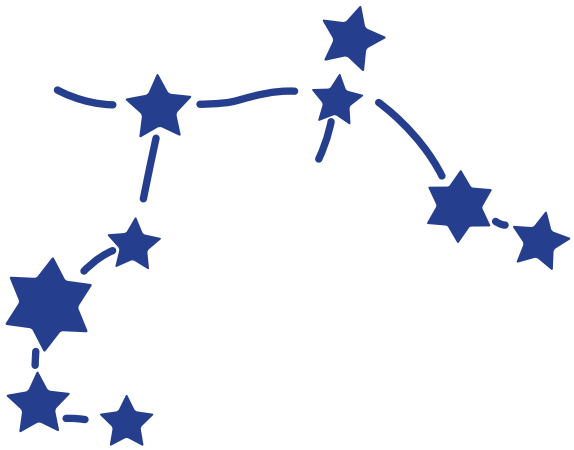
第 1 回	川合　全弘（法学部 教授） 「『中間答申書』の再考察――その意義と教訓――」	2022 年 4 月 27 日
第 2 回	岩本　誠吾（法学部 教授） 「AI 自律兵器規制の方向性～倫理規範から法規範へ、人道法から軍縮法へ」	2022 年 5 月 25 日
第 3 回	秋富　克哉 (京都工芸繊維大学 教授) 「歴史的形成作用としての科学技術――西田幾多郎とハイデッガー」	2022 年 6 月 22 日
第 4 回	木村　成介（生命科学部 教授） 「遺伝子と文献から探る水菜と壬生菜の歴史」	2022 年 7 月 27 日
第 5 回	志賀　浄邦（文化学部 教授） 「〈プラグマティズム〉という視座から見たインド仏教」	2022 年 10 月 5 日
第 6 回	中谷　真憲（法学部 教授） 「ソーシャル・キャピタルの政策的創造に関する理論と実践：グローカル・プロジェクトを手掛かりとして」 王　　鍵（中国社会科学院 教授） 「学問と政治の視点から見る中国国内の日本学研究」	2022 年 11 月 30 日
第 7 回	川上　雅弘（生命科学部 准教授） 「ゲノム編集時代の科学コミュニケーション」	2023 年 1 月 25 日

共催企画

法学部主催、世界問題研究所・国際関係学部・法学会共催講演会	
倉井　高志氏（前・駐ウクライナ大使） 「ウクライナ情勢から考える―世界を読み解くこと―」	2022 年 6 月 28 日

《研究所メンバー》

川合　全弘　　所長・法学部 教授
岩本　誠吾　　法学部 教授
志賀　浄邦　　文化学部 教授
岑　　智偉　　経済学部 教授
中谷　真憲　　法学部 教授
耳野　健二　　現代社会学部 教授
久保　秀雄　　法学部 准教授



京都産業大学世界問題研究所　ニューズレター　第 8 号　2023 年 3 月

発　行　京都産業大学世界問題研究所　京都市北区上賀茂本山　TEL (075) 705-1468
編　集　京都産業大学世界問題研究所所員　久保 秀雄／同事務局　藤本 興子
印　刷　中西印刷株式会社